

埼玉縣熊谷勞政事務所

人間の條件

第二部

五味川純平著

三一新書

著者略歴

大正五年満州に生る

東京外語英文科卒

満州で就職、応召

昭和二十三年引揚

現住所 東京都渋谷区代々木西原九五ー

人間の條件 第二部

定価 170 円

1956 年 8 月 30 日 第一版発行

1958 年 10 月 20 日 第四十四刷発行

著者	五味川純平
発行者	田畑弘
印刷所	株式会社文弘社
製本所	永島製本所

発行所 株式会社三一書房

京都市左京区北白川西平井町24
振替 京都 6403 番
東京都千代田区飯田町2の14
振替 東京 84160 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 50

人 間 の 條 件

第 二 部

五 味 川 純 平 著

三 一 書 房

第二部

二日後の夜半、十一名の特殊工人が宿舎から逃亡した。

鉄条網に何枚ものアンペラをかぶせてあった。そこを乗り越えて行ったように見えなくもなかった。だが、その程度の措置で電流の効力を克服出来るとも思えない。四棟の宿舎を隈なく検査したが、脱出に役立つとおぼしい器具は見当らなかった。労務手達は腹を立てて、オンドルに敷いてあるアンペラを一枚残らず取り上げた。

前に四人が現場から逃亡したとき、梶は王亭立に云ったものだ。四人五人でなく、十人も二十人も逃げるがいい、と。彼らはその通りに実行したことになる。

「野郎ら、なめてやがる！」

と、沖島が額に背筋を立てて怒った。

「あの五人の代表のツラがひん曲るほど叩きのめして、白状させてやる！」

「せっかちにやり過ぎるよ」

と、梶が冷やかに云った。

「じゃ、どうするんだ？」

「宿舎は僕の責任だ。あんたに迷惑はかけない。所長にもあんたに文句は云わせない。僕は手柄を一人占めにするつもりはないがね、責任は負うよ」

「この野郎！ 何がどうしたってんだ！」

沖島が眼をむいて呟鳴った。梶は自分の気の狭さを恥じて、その原因を作った美千子を怨んだ。

「……失敬。僕が云い過ぎた。しかし連中を責めるのはよくない」

梶は電話で所長に逃亡を報告した。所長は一度は梶の耳が鳴るほど呟鳴りつけたが、急に思い直した。それというのが、現在では、一般工人の就労率は全体を通じて従来の平均より二割以上増加しているのである。つまり労務は突撃月間のトップを行っていることになる。それがあるから、現場の出鉱も徐々に二割増産の線に近づいて来ている。この際、あまり呟鳴りつけて梶をくさらせるのは損であった。それと、もう一つは、所長の命令で宿舍に女を入れることになったが、逃亡は二回とも女が入った日から数日後に起っている。もしこの間に因果関係があるとすれば、所長の面目はまる潰れなのだ。

「よく調べて対策を講じ給え。憲兵隊の方の弁明も考えておくように」ということで電話を切った。

「女を洗ってみよう」

と、梶は沖島を誘って出かけた。

金東福は入り口のところで二人を迎えて、こぼれるような媚を撒き散らしながら、一番嫌いなものは共產匪とヒキ蛙だと云った。彼らを助けて何の得があるだろう？ 彼女らは彼らの肉慾の排泄器具として、行くたびに死にそうな重労働を強いられるだけである。もうあんなことはやめにして欲しい。そう雄弁にまくし立てた。

「わかった」

と、梶が云った。

「やめるかもしれない」

それを聞きかじって、楊春蘭が飛び出して来た。

「ワタシ、ヤメルナイ！　ワタシ、イクヨ！　ワタシ、イクヨ！」

梶にむしゃぶりつくような取り乱した云い方であった。

「どうしたんだ？」

と、沖島が梶に訊いた。

「高のリーベだ」

「そうか」

沖島はニヤリとした。

「高は逃げたぞ。お前を捨ててな。知らなかったのか？」

「ウソイウ！　タメナイカ！」

楊春蘭は唾を飛ばして叫んだ。

「カジサン、コウサン、ニケルナイヨ。ニケタ、アルカ？　ナイタロ？」

「逃げたんだよ」

と、沖島がまた云った。

「ニケルナイ！　コウサン、ニケルナイ、イタヨ。ミンナ、ニケルテモ、トシテモ、ニケルナイ、イタヨ！」

「じゃ、誰が逃げると云っていたんだ？」

「タレ、イウナイヨ。ニケルノハナシ、キクナイダカラ」

沖島はいきなり逆手打を楊春蘭の顔に食わせた。

「甘く見るな！正直に云うんだ！」

春蘭は泣き叫んだ。

「あの人は逃げない。あたしを置いて行く筈がない！」

沖島はまた一発見舞った。楊がよろめいた。

「云え！」

「知るもんか！知らないんだ！知らないんだ！知らないんだ！」

沖島は続けさまに三四発張った。

「よさないかね！」

梶が嘔鳴った。

「放つといてくれ！」

と、沖島が嘔鳴り返した。

「こんな奴らになめられてたまるか！」

梶は楊春蘭を引き寄せた。

「泣くな。高は逃げやしない。安心しろ。お前はほんとうに何も聞かなかったか？」

女は大声で泣きながら「知らない、知らない」と繰り返した。梶は金東福を見た。東福は、それまで瞬きもせず梶を見つめていたが、視線が合うと、急いでそらした。

「お前も何も聞かなかったか？」

東福は今度はしんみりした調子で答えた。

「ワタシナ、ハナシキイタ、ミナ、カジサンイウヨ。イワナイダラ、カジサンオコル。カジサンオコトラ、ロクジウニ、ミナ、コマルダカラネ」

「嘘ではあるまいな？　嘘を云うと、俺はほんとうに怒るぞ」

「カジサン、イイノココロ、ワタシ、シテルヨ。ウソナイ」

女の顔の皮下脂肪の下をどんな感情が流れたとしても、梶には見分けられなかった。

梶と沖島は慰安所から出た。沖島はむっつりとしていた。

途中で、二人は変電所に寄ったが、異常は確かめられなかった。夜勤者は既に交替したあとであった。昼勤の日本人は、夜勤者が夜半仮睡をとることを頑強に否定した。電力を預る者にそんな怠慢はあり得ないというのである。夜勤の日本人が正しく勤務していれば、同じ夜勤の満人雇員が何らかの手段を弄する余地は殆どない。

「変だ」

と、外に出てから梶が呟いた。

「電流が止ったという証拠もないが、止らなかったという証拠もない。もし電流が止らなかったとすれば、十一人の人間が蒸発してしまったことになる」

「蒸発したんだろうさ」

と、沖島が不機嫌に云った。

「どんな工合に蒸発したか、確かめる気になりや、雑作はねえんだ」

「どうやって？」

「何でも突っ込んで行きたがる君がよ、なんだって変電所の上っツラだけ撫でまわすようなことをするんだ？」

「証拠がないよ。何が出来る？」

沖島はペツと唾を吐いた。

「じゃ、そうだとしておくさ」

「何を怒ってるんだい？」

「怒ってやしねえよ、馬鹿々々しい！ 君はとんでもねえフェミニストだ」

「そうかもしれない」

「女が知らねえわけはねえだろう？」

「そうかもしれない」

「チェッ！」

と、沖島はまた唾を吐き棄てた。

「僅かなことで陳をしたま殴りつけた男がよ、相手が女となると大事な急所で甘くなりやがる」

「……女は僕に任してくれ。僕はフェミニストだそうだから」

と、梶は鉄条網の方を見ながら、素気なく云った。

「これから王や高に会うけど、あんたはまた殴るかね、殴らないかね？」

「そんなことはわからねえよ」

「じゃ、先きに労務へ帰ってくれ」

梶は傲慢とも見える様子で沖島を振り捨てて、一人で鉄条網の中に入った。

王享立が紙を巻いたのを持って宿舎から出て来た。王の注文で梶が与えた紙である。王はそれを黙って手渡した。

「お前達は俺の忠告通りに逃亡した」

と、梶が云った。

「お前達が俺の忠告にこんなにも従順だったことは、はじめてだ。何か他のことでこの程度に従順にされると、俺は定めし心苦しく思わなければならなかっただろう。今度の逃亡の結果がどういうことになるか、俺にもわからない。どういうことになるかと、お前達自身で決定したことの結果だからな」

王は注意深く梶を見守っているだけで、口を開こうとはしなかった。

「ついでにつけ加えておくが」

と、梶が続けた。

「俺は、実際の話、お前達のために努力する張合を失ったような気がする。今日云うことはそれだけだ」

梶は受け取った紙の束を持って、さっさと出て行った。

梶が事務所に戻ってから、間もなく、所長から電話がかかった。古屋を本館へ呼んでの話では、今後女を一切入れないようにするか、それとも女の中にスパイを作って再々送り込むか、どちらかの方法がいいかという

のである。

「御命令ですか？」

と、梶は冷淡に訊き返した。

「いや。相談だよ」

「所長はどうお考えになりますか？」

「いや、私は素人だし、毎日タッチしているわけではない。君の判断にまつより他はないんだからね」

所長の声はおとなしかった。梶はにが笑いした。所長は逃げているのだ。責任を回避したいのだ。所長の顔が皺一本の動きまで見えるようであった。梶はテーブルの端にいる陳の上に漠然と眼を留めているながら、所長の顔をそこの空間に描いていた。

けれども、陳は、自分の上に据えられて動かない梶の眼に、恐怖を感じた。冷く澄みきって肚の底まで見透かしているようでもあるし、暗く濁って怒りが燦っているようにも思えた。

いまのうちに白状してしまえば楽になる。その代り、身の破滅だ。とても楽どころではない。いや、やはり白状した方がいい。こんなことが長く続いてはたまらない。赦しを乞うのだ。一度だけは許してくれるだろう。いやいや、パイメンの僅か五キロばかりのことでも、自分の立場が悪くなれば、あんなにひどく殴りつけた男だ。とても許してくれる筈がない。それに、何も悪いことをしたわけではない。不幸な同胞を助けただけではないか。

梶が電話で云っていた。

「僕は女を入れることをやめようと思つてはおりませんし、スパイを作ろうとも考えておりません」

してみると、梶は女を疑ってはいないらしい。伏眼がちに梶の方を窺いながら、陳は不安が少し薄らいだ。

「そうです。僕は女を入れることに反対でした」

と、梶が云った。

「氣が変ったんです」

何故だろう？ 陳は梶の方を偷み見た。梶は、王享立が鉛筆で書き込んだ何枚かの紙をパラパラとめくりながら、電話を聞いていた。

「ええ、沖島さんは女が手引きしたと考えています」

と、梶が暗く笑って、云った。

「事実かもしれませんが。事実だとしても、女を摘発したからと云って、特殊工人の問題が解決出来るわけではないんですから」

不安が陳の胸に倍の力で戻って来た。梶はおよその見当をつけていて、わざと知らぬふりをしているのではないか？ もしそうだとしたら、いまのうちに白状して、慈悲を願った方がいい。

梶は電話を切った。静かな声が、陳を呼んだ。陳は半ば観念して立って行った。

「これを、ざっと日本語に直してくれないか」

と、梶は、王享立の手記を陳に渡した。

「私ハ日本人ガ好ミソウナトコロカラハジメルコトニシマス」

と、王享立は書きはじめていた。

「女ニ関スル話カラデアリマス。私ハ他ノ問題カラハジメテモヨイノデス。タトエバ、日本人ガ發明シタ五族協和ノ精神トイウ問題カラハジメテモヨカッタノデス。シカシ、私達ガココニ来タトキカラ、嚴密ニ云イマスト、ソノズツト以前カラ、ツマリ、私達ガ私達ノ故郷カラ、私達ニハドウシテモ納得ノ出来ナイ理由ニヨツテ拉致サレタ瞬間カラ、私達ハ日本人ガ五族協和ノ精神ヨリモ、女ノ方ガズツト好キダトイウコトヲ知りマシタ。コレガ、私ガ、女ニ関スル話カラハジメル主ナ理由デス。

ココノ日本人管理者ハ、私達ノ頑固ナ皮膚病ヲ治シテクレマシタ。ココノ日本人管理者ハ、次ニ、私達ガ生キテ行クタメニ必要ナ、ソシテ労働スルタメニハモット必要ナ、最低限度ノ栄養ヲ与エテクレマシタ。最低限度ノ栄養サエモ与エラレナカッタ日本軍管理ノトキニ較ベレバ、コノ最低限度ノ栄養ハ、最大限度ノ福音ト云ワナケレバナリマセン。或ル日、第二ノ福音ガ私達ヲ訪レマシタ。コノ鉄条網ノ中ニ多勢ノ女ガ入ッテ来タコトデス。日本人管理者ハ博學ナ人デスカラ、人間ニ関スル動物学ノ正確ナ智識ヲ持ッテイマス。ツマリ、コウイウコトデス。一匹ノ試験用動物ヲ檻ノ中ニ入レテ、死ナナイ程度ニ、ソシテ体力ヲ徐々ニ消耗スル程度ニ餌ヲ与エテ、皮下脂肪ヲナクシ、骨ト皮バカリニナッテモ、生殖腺ノ機能ガ依然トシテ失ワレナイコトヲ実証スルタメニ、ソノ檻ノ中ニ一匹ノ異性ヲ入レルト、実ニ涙グマシイ努力ノ末ニ、交尾ガ遂行サレマス。メデタイコトデアリマス。日本人管理者ハヨクソノコトヲ知ッテイマシタ。鉄条網ノ中ノ五百何十匹カノ牡ニ四十四ノ牝ヲ与エルト、何百回カノ交尾ガ、実ニ涙グマシイ努力ノ末ニ遂行サレルニ違イアリマセン。ドウイウ形式ノ下ニソノ交尾ガ行ワレタカ、日本人管理者ノ動物学ノ智識ノ發展ノタメニ報告シマス。

動物学ノ範疇ニ羞恥心トイフ分野ガアツタカドウカ、私ハ忘レテシマイマシタ。多分ナカッタト思イマス。最初ノ四十人ノ男ト四十人ノ女ハ、互ニ相手ノ顔ヤ形ヲ見ラレルヨウニト日本人ノ思イヤリカラ、消サレズニアツタ薄暗イ電灯ノ明リノ下デ、ドウヤツテメデタイコトヲハジメルベキカ、迷イマシタ。ソノウチニ、何組カノ男女ハ頭ト足トヲ他ノ組トハ反対ノ位置ニ置クコトニヨツテ、互ニ羞恥心ヲ不必要トスル方法ヲ発見シマシタ。タトエバ、私ノ足ハ、私ノ隣ニ寝テイルアナタヤアナタノ女ノ腰ヤ恥部ヲ見ルコトハ出来マセン。マタ、私ノ足ハ、アナタヤアナタノ女ノ眼カラ見ラレテイルコトニ羞恥ヲ感ズル感覺ヲ持ッテオリマセン。ナカナカ合理的ナ方法デハナイデショウカ？ マタ、別ノ何組カノ男女ハ、自分達ノ頭ヲ有リ合セノ布カ何カデ蔽イ隠ス方法ヲ發明シマシタ。他人ハ自分達ヲ見ルケレドモ、自分達ハ他人ヲ見ナイコトニヨツテ、誰モイナイトコロヘ行ッタノト同ジ效果ヲ齎ソウトイウワケデス。何事モ相對的ナノデスカラ、コレハナカナカ哲學的ナ方法デハアリマセンカ？

チヨット眼ヲ閉ジテ想像シテゴランナサイ。世ニモ壯觀ナ光景デハナイデショウカ？ 優レタ画家ナラバ、コレヲ汚辱トデモ題シテ、後世ニ殘ル傑作ヲ描クデショウ。コノヨウニシテ、当事者達ハ、汗ト涙ト疲労ノ中デ、モハヤ誰モ自分達ヲ人間トハ呼バナイコトヲ確認シマシタシ、同時ニ、日本人管理者ハコノ壯大實驗ノ結果、人間トイウ動物ガ皮下脂肪ヲナクシ、骨ト皮バカリニナツテモ、生殖機能が依然トシテ失ワレナイトイウ科學的ナ確証ヲ握ルコトニ成功シマシタ。

ツイデノコトニ、私ハ、日本人管理者ノ科學的探究ノ才手伝イヲシマス。ソレハ、コウイウコトデス。太古ノ人類ノ祖先ガ、或ル天氣晴朗ナ日ニ、手ニ棒切ヲ持ッテ、ソレデ何カヲ打ツコトヲ覺エタ瞬間カラ、類人猿——動物カラ永遠ニ訣別シ、マタ或ル日、ソレハ多分寒イ日ノコトダロウト思イマスガ、フト、火ヲ使ウコト